

第 5 章

研究のまとめ

研究のまとめ

今年度は、昨年度に各学部で取り入れた共通の視点を用いて、実態把握から年間指導目標の設定を行い、さらに、年間指導目標から前・後期における各授業場面の目標設定の仕方について整理をしてきた。各学部が取り入れた共通の視点、取り組みにおける成果と課題は以下の通りである。

1 各学部の取り組み及び成果と課題

1-1 小学部の取り組み

(1) 実態把握から目標設定における共通の視点

<実態把握における学部共通の視点>

- ・行動観察：自立活動の6区分26項目に沿った視点
「よさ」と「困っていること」に注目する視点
できる条件や場면을踏まえた「現在の段階」や「有効な支援方法」を見取る視点
各授業場面の指導に活かせる17点の共通項目を見取る視点
- ・本人及び保護者の願い
：個別面談による保護者からの聞き取り
：家庭環境調査書からの読み取り
- ・発達段階：KIDS発達プロフィール
：太田ステージ評価

<実態把握の整理における学部共通の視点>

- ・困っていることの整理：困っていることの要因を考える
- ・「よさ」の整理：手だてとして指導に活かせる「よさ」
目標として伸ばしたい「よさ」

<目標を設定する学部共通の視点>

- ・困っていることの要因を踏まえる。
 - ・どのように「よさ」を活かすかを考える。
 - ・目標を達成することで期待される姿を考える。
- これらを整理し、年間指導目標設定までの考え方を記入する。
- ・年間指導目標によって、伸ばしたい力を設定する。
 - ・学習場面を設定する。
 - ・「伸ばしたい力」がぶれないように、前・後期の目標、授業目標を設定する。

(2) 成果

【主に実態把握・情報の整理に関すること】

- ・行動観察の実態と発達段階の実態を併せて考えることで、困っていることの背景を考えやすく

なり、目標が児童に適しているか判断する指標の一つになった。

- ・児童の困っていることを、行動観察と併せて発達段階からも把握することができた。
- ・困っている原因を導くため、「児童の具体的な場面を思い浮かべる」という共通のプロセスを通して、「児童がもどかしさを感じている」「児童がストレスを感じている」「児童が不安を感じている」等、児童の立場に立って具体的に考えることができた。そして、その考えを基に目標を設定すると共に、児童の立場に立った手だてを考案することができた。

【主に目標の設定に関すること】

- ・「伸ばしたい力」を軸に、年間指導目標から本時の個人目標まで、一貫して目標設定を考えることができた。
- ・「よさ」「困っていることの要因」「目標までの考え方」が整理され、明文化されることで、シートを作成した教員以外の人でも、「この力を活かせば、この力を伸ばせば、こういうことができるだろう」と、授業場面の目標が考えやすくなった。

【主に手だての考案に関すること】

- ・児童が目標に向かって力を発揮するための手だては、「よさ の整理から考案できる場合」と、「困っていることの要因をより深く探ることで考案できる場合」があることが確認できた。
- ・児童が目標に向かって力を発揮するための具体的な手だては、「理解を促進する手だて」「動機を高める手だて」「学習活動に集中または安心して取り組める環境を設定する手だて」が、実際の授業では特に重要であることが示唆された。
- ・実践を通して、学習場面に即した実態から導く手だてに、児童の「よさ」を活かした手だてを併せて指導することにより、より高い学習効果が得られることがわかった。
- ・「困っていること、苦手なこと」は、その原因を考えて記録することで、実態から目標へのつながりが見えやすくなることがわかってきた。また、原因を考えることで目標に取り上げられる点、障害特性等の環境設定などで配慮すべき点が整理されるのではないか、ということがみえてきた。

(3) 課題

- ・シートの作成を基に導かれた児童の「よさ」「困っていること」「困っていることの要因」「年間指導目標までの考え方」を、日常の教育実践の中で活かし、なるべく短いスパンでPDCAサイクルを回していくこと。
- ・本研究の成果を活かしながら、実践を通して専門性を高めていくこと。
- ・評価の共通の視点について再検討して改善し、次の授業に活かしていくこと。

1-2 中学部の取り組み

(1) 実態把握から目標設定における共通の視点

<実態把握の整理における学部共通の視点>

- ・「強み」:「自らはじめる 自らかかわる 継続する」姿を主体的な姿として、ねらいや目標にむかって活動する場面から「行動の基となる能力（主体的な行動の基となる生徒の

長所・特徴である力)を見取り、その力を発揮するための「支援の方法と程度」を考える。

- ・「弱み」：自立活動の6区分26項目を用いて、現在の困っていることや課題を把握する。それらを将来像と照らし合わせて整理・分析し、将来に向けて引き上げたい「ひきあげる力」と、障害特性や環境などが要因となり、配慮や支援が必要となる「おぎなう力」を設定する。

<目標を設定する学部共通の視点>

- ・期待する姿：「中学部卒業時にはこうなっていてほしい。そのために今年度末にはこうなっていてほしい。」という姿を設定する。
- ・指導仮説：「期待する姿」に対して、「強み」と「弱み」をふまえて、どのような支援をどの程度することで、どのような力が発揮・成長し、どのようなことができるようになるか、を考えていく。

- ・前・後期の目標を設定する際の「3つの観点」

「活動場面」：その目標について、「いつ・どこで・だれと」のように、時間・場所・人（ペアや行動の対象）を具体的にしていく。目標や学習内容によっては、それらの要素がすべて入るとは限らないが、どのような場面なのかが明確になるように考える。

「活動内容」：その目標となる活動について、「なにを」行うのか、役割や学習活動について具体的にしていく。どのような活動をどの程度行うのかが明確になるように考える。

「姿」：「活動場面」「活動内容」に対して、「どのように」取り組むのかを、関心・意欲・態度の要素から具体的にしていく。「姿」として、どの程度を求めているのかが明確になるように考える。

(2) 成果

【主に実態把握・情報の整理に関すること】

- ・これまでの「強み」の見取りに加え、「弱み」を見取る視点を設定することで、より生徒の実態の見取りが深まり、その実態を整理・分析することで、行動の原因や理由を考えることができるようになった。

【主に目標の設定に関すること】

- ・「弱み」の視点と「期待する姿」・「指導仮説」という考え方を導入することで、どのように「強み」を活かし、どのように「弱み」へアプローチするのかが分かりやすくなり、明確な根拠に基づいて実態に即した目標や支援が設定できた。
- ・教員間での目標の検討時や保護者への説明時に、目標設定の理由や支援の方法などの説明がしやすくなった。
- ・生徒への指導・支援がより実態に即したものになり、それらの効果が高まった。
- ・活動場面（いつ・どこで・だれと）、活動内容（なにを）、姿（どのように）という3つの観点が前・後期の目標から単元目標へ、単元目標から本時の目標へとおりていく過程で具体性が高まり、目標同士のつながりを確認することができた。また、「年間指導目標」と「前・後

期の目標」の整合性を確認することができた。

- ・前・後期の目標を考える過程で、観点である「場面」「内容」「姿」を意識することで、子どもを伸ばしたいのか、教員間でより共通理解を図れるようになった。
- ・その生徒の「年間指導目標」を各授業で積み重ねていることがより明確になった。
- ・「前・後期」・「単元」・「本時」の目標を考える際にも「指導仮説」をふまえていることが確認された。

(3) 課題

- ・個別の年間指導目標の評価について検討し、授業改善につながる仕組みを整理していくこと。
- ・生活単元学習以外の授業について、各教科の目標や内容も整理していくこと。
- ・学習評価と指導評価、そのあり方について考え、個別の指導計画における目標設定とその評価・見直しの方法を明らかにしていくこと。

1-3 高等部の取り組み

(1) 実態把握から目標設定における共通の視点

<実態把握に取り入れた視点>

- ・「〇〇（支援）すると、～できる。」「〇〇（場面、状況、相手）では、～できる。」など、手だてに活かせる実態を具体的に記述する。
- ・生徒の個人内差における「強み」と「弱み」を整理して記述する。
さらに、目標だてしない弱みは、健康上及び障害特性による配慮事項を分けて記述する。

<目標設定に取り入れた視点>

- ・将来像にかかわる現時点での実態に、「できていること」と「課題」に分けて記述するという決まりを設定する。
- ・将来像に関わる現時点での実態から「23～25歳までに高める必要のある力」を設定し、さらに目標とするための優先順位をつける。
- ・「23～25歳までに高める必要のある力」を基に長期目標を設定し、さらにそこから年間指導目標を検討することにした。

<手だての設定に取り入れた視点>

- ・整理された実態から学習活動において「予想されるつまずき」と「つまずきの要因」を考え、それを踏まえて手だてを設定する。

(2) 成果

【主に目標の設定に関すること】

- ・将来像に向けて、「できていること」と「課題」を整理して記述することで、課題が明確になり、次の段階の目標が考えやすくなった。
- ・将来像の実現に向けて高める必要のある力については、そこから年間指導目標を考える前に、高等部三年間での目標となる「長期目標」を考え、そこから年間指導目標を考えるようにしたことで、より段階的な目標を設定できるようになった。
- ・各授業で将来像と見合わせた時にも矛盾のない内容が年間目標として降りてきており、そこから学習の内容で具体化した前・後期目標、そして各時間の授業における目標を設定するこ

とができた。

【主に手だての考案に関すること】

- ・「強み」と「弱み」を整理し、さらに「〇〇（支援）すると、～できる。」「〇〇（場面、状況、相手）では、～できる。」など、手だてに活かせる実態を具体的に記述した「個別の支援計画（年間）①」を確認することで、生徒の特性やこれまでの指導の経緯を踏まえた手だてを設定することができたり、授業場面において有効な手だてを考えたりすることができるようになった。
- ・「予想されるつまずき」「つまずきの要因（障害特性）」を考えることで、より生徒一人一人の障害特性に応じた指導の手だてを考えることができるようになった。
- ・教員が個人個人で考えていたことが文章化されることで、より適切な手だての設定につながったり、教員間や保護者との間で指導・支援について共有したりできるようになったと考えられる。

(3) 課題

- ・「23～25 歳までに高める必要のある力」から優先順位が高い「長期目標」を絞り込んでいくための視点を検討すること。
- ・「個別の指導計画（年間）①」に書かれている実態を、指導に活かせるものに追加、修正していくこと。
- ・「個別の指導計画（年間）①」の各項目に記述する内容を明確にすること。
- ・日常的に主なつまずきの要因である、生徒の障害特性を考えていく習慣を教員が身に付けていくことで、作成や見直しの時間は短くなり、「支援計画シート」の必要性は低くなっていくことが考えられるため、継続した取り組みを行うこと。

2 学校研究としての一次の成果

昨年度から取り組んできた一次の取り組みによって、学部ごとに実態把握から目標設定までに必要な視点や考え方について整理ができてきた。前研究から大事にしてきたことを含め、各学部で設定をした共通の視点は、以下のとおりである。

表1 実態把握から目標設定において共通する点、及び活用の仕方

共通の視点 (○) や考え方 (・)	各学部における活用の仕方	
○児童生徒の得意な面、強みとして発揮される面についてとらえること。	小	得意なこと、興味関心を把握し、手だてとして指導に活かせるか、目標として伸ばしたいかを整理する。
	中	学校生活において主体的に活動している姿、そこで発揮している姿を把握し、「将来像」を作成する。
	高	指導に活かせる力を「強み」として捉え、手だてに活かす。
○児童生徒が困っていたり、苦手としていたり弱みとして現れる面についてとらえること。 ・その要因を考え、配慮や支援が必要である点と力を伸ばしたい点にわける。	小	子どもが困っていること、大人がこうなってほしいと思うことについて、環境や発達段階等から原因を考え、目標・手だてに活かす。
	中	生徒の困っていることや課題を見取り、その行動の理由・原因を整理・分析することで、「ひきあげる力」と「おぎなう力」に整理し、指導仮説に活かす。
	高	支援や指導が早急に必要とされる力を「弱み」として捉え、目標としては取り組むべきではない点を配慮事項として整理する。
○条件や支援などを併せて実態をとらえること。	小	現在の発達段階や、有効な支援方法が分かるようにし、困っていることの原因の考察や、目標及び手だての考案に活かす。
	中	学校生活における主体的な姿の基となる「行動の基となる能力」を発揮させるための支援の方法と程度を把握し、指導仮説に活かす。
	高	学習活動における、つまずきの要因について分析する際や、指導に活かせる手だての設定に活かす。
○目標を達成することでこうなってほしいという、めざす姿を設定すること。 ・その姿にむけて、現在の実態を踏まえ、どのように指導、支援をしていくかを考える。	小	把握した実態から「こうなってほしい」という具体的な姿、そこに向けてどういう力を伸ばしたらよいかを考え、それらを踏まえて目標を設定する。
	中	「将来像」をめざし、中学部卒業時に「期待する姿」を設定し、整理した実態からどのように指導・支援を行うかを考え、目標を設定する。
	高	「将来像」に対して、できていることと課題を整理し、高める必要のある力を設定し、それを踏まえ長期目標、及び年間指導目標の設定をする。

それぞれの学部の取り組みから、全校に共通の視点や考え方は表1のようなものが挙げられる。また、研究としての取り組みとしては挙げられていないが、小学部が「実態把握」を行動観察からだけではなく、保護者からの聞き取り、発達検査の結果などを踏まえて行っているように、中学部、高等部では保護者からの聞き取り等を踏まえて「将来像」を作成し、目標設定につなげている。目標設定のための実態把握としては、行動観察からだけでなく保護者からの聞き取りや、検査結果を含む引継ぎ資料等も踏まえながら実態をとらえる、というのも全校に共通である。

それを踏まえ、「実態把握からの目標設定」において全校として共通に大事にしたい視点や考え方を整理すると以下ようになる。

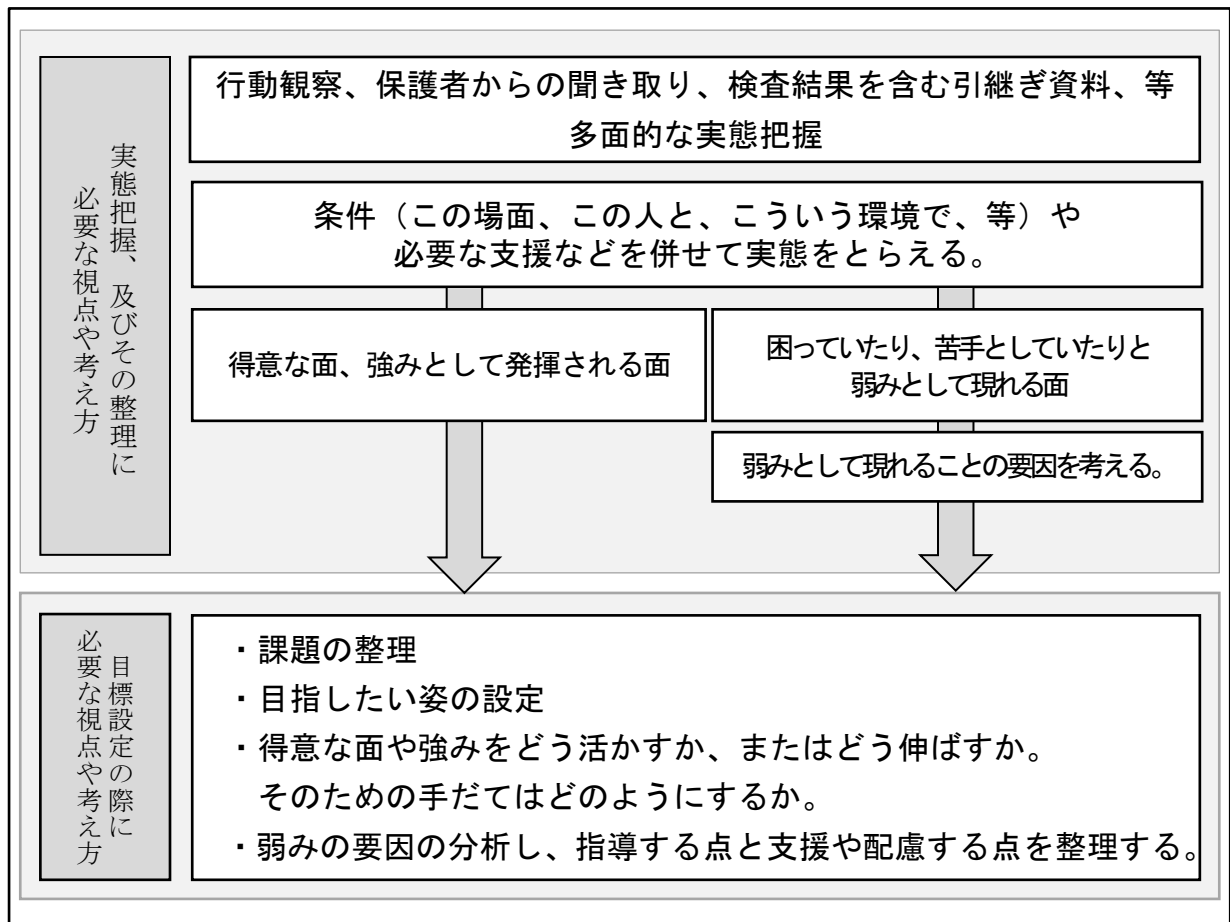


図1 実態把握からの目標設定において全校で大事にしたい視点や考え方

上記の図の中には表記されていないが、図の中のどの段階に「将来像」がかかわってくるかは、学部によって位置づけが変わってくる。小学部では、このような目標、手だての設定により「よさ」が発揮された姿から「将来像」を考えるので、この図の中にはかかわってこないが、高等部では、設定された「将来像」から目標を考えてくるので、上記の図の「実態把握、及びその整理に必要な視点や考え方」は主に手だてを考案する際に活かされてくる。

ここでの目標設定とは、目標と目標を達成するための手だてを併せて考えている。一次の取り組みの成果として、「実態把握からの目標設定」において、全校で共通して大事にしたい視点や考え方は、以下の通りである。

＜実態把握、及びその整理に必要な視点や考え方＞

- ・行動観察、保護者からの聞き取り、引継ぎ資料等、多面的な実態把握を行う。
- ・行動観察では、条件（場面、人、環境 等）や必要な支援などを併せて実態をとらえる。
- ・把握している実態にかかわる情報を、「得意な面、強みとして発揮される面」と「困っていたり、苦手としていたり、弱みとして現れる面」という視点で整理する。
- ・「困っていたり、苦手としていたり、弱みとして現れる面」については、なぜ弱みとして現れるのか、という要因を考える。

＜目標設定（目標、手だて）の際に必要な視点や考え方＞

- ・把握した実態から、課題を整理する。
- ・どのような姿になってほしいのか、何をめざしているのかを明確にする。
- ・得意な面や、強みとして現れている力を伸ばす、発揮できるようにする、という方向で目標や手だてを考える。
- ・弱みとして現れている面の要因の分析から、指導する点と、支援や配慮をする点を整理する。

3 課題と今後の方向性

昨年度からの取り組みによって、学部ごとに、適切な実態把握を行い、児童生徒に合った目標設定をするために必要な視点や考え方が整理されてきた。全校として共通の視点や考え方もみえてきた。しかし、どの学部においても、目標や手だてを考える際に重要とされている「弱みとして現れていることの要因を考える」部分や「どのような指導や支援をすることで、めざす姿にせまるか」という部分が、教員の思考に委ねられている。一次の取り組みの中で、「こういう点を考えることが大事」ということはみえてきたが、この部分については二次以降の取り組みを行う中でも考え方の整理を継続していきたい。

また、前・後期の各授業場面における目標を設定する際には、「教科・領域等の内容を踏まえて」ということが挙げられていたが、教科・領域等の目標や学習内容がどのように個別の目標にかかわってくるかについては、あまり整理が進んでいない。こちらについても、引き続き整理に取り組んでいく必要がある。

各学部からは、一次の取り組みの課題として、「評価の在り方について」や「継続させていくための仕組みについて」ということが挙げられた。今後の取り組みとしては、一次の取り組みで整理された視点や考え方に基づいて設定された目標を評価し、次の実践に活かせるようにしていくことが求められる。今後は、評価に焦点をあて、どのような視点で目標を評価すればよいかの整理を行うこと、そして、継続して取り組んでいくための仕組みを確立することに取り組んでいきたい。

<引用・参考文献>

全体

- 1) 全国特別支援学校知的障害教育校長会. 新しい教育課程と学習活動Q & A特別支援教育〔知的障害教育〕. 東洋館出版社. 2010
- 2) 海津亜希子. 個別の指導計画作成ハンドブック. 日本文化科学社. 2007
- 3) 石塚謙二. 全国特別支援学校知的障害教育校長会. 知的障害教育における専門性の向上と実際 知的障害教育指導の充実と人材育成を目指して. ジアース教育新社. 2012
- 4) 文部科学省HP. 次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて(報告). 2016
- 5) 文部科学省. 特別支援学校学習指導要領解説. 教育出版. 2009

小学部

- 1) 文部科学省. 特別支援学校学習指導要領解説. 教育出版. 2009
- 2) 文部科学省. 小・中学校における LD (学習障害), ADHD (注意欠陥/多動性障害), 高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン (試案). 2004
- 3) 岡山県総合教育センター. 自立活動ハンドブック ―知的障害のある児童生徒の指導のために―. 2015
- 4) 篁倫子 (編著). 特別支援教育を進めるために学校で活かせるアセスメント. 明治図書出版株式会社. 2007
- 5) 沢崎達夫. 観察法. 松原達也 (編). 心理テスト法入門. 日本文化科学社. 2002
- 6) 遠城寺宗徳. 遠城寺式・乳幼児分析的発達検査法 (九大小児科改訂版). 慶應義塾大学出版. 1977
- 7) 津守真・稲毛敦子. 増補 乳幼児精神発達診断法 0才～3才まで. 大日本図書. 1995
- 8) 津守真・稲毛敦子. 乳幼児精神発達診断法 3才～7才まで. 大日本図書. 1965
- 9) 三宅和夫 (監) 大村政男・山内茂・高嶋正士・橋本泰子 (著). KIDS (キッズ) 乳幼児発達スケール (手引き・タイプA・タイプB・タイプC・タイプT). 発達科学研究教育センター. 1991
- 10) 埼玉大学教育学部附属特別支援学校. 研究集録 39 知的障害のある生徒へのキャリア教育の在り方を探る―児童生徒の「自己実現」をめざす取り組み― (2年次). 2011

- 11) 埼玉大学教育学部附属特別支援学校. 研究集録 40 知的障害のある生徒へのキャリア教育の在り方を探る—児童生徒の「自己実現」をめざす取り組み—(3年次). 2012

中学部

- 1) 石塚謙二. 全国特別支援学校知的障害教育校長会. 知的障害教育における専門性の向上と実際 知的障害教育指導の充実と人材育成を目指して. ジアース教育新社. 2012
- 2) 石塚謙二. 全国特別支援学校知的障害教育校長会. 知的障害教育における学習評価の方法と実際 子ども確かな成長を目指して .2011
- 3) 福島大学附属特別支援学校. 授業づくりのサポートシステム. 2013
- 4) 山形大学附属特別支援学校. 研究報告. 2014
- 5) 鹿児島大学教育学部附属特別支援学校. 研究紀要第 17 集 今を, 将来をよりよく生きる子どもを目指した授業づくり. 2009
- 6) 筑波大学附属大塚特別支援学校. 研究紀要第 61 集 「カリキュラム運用プロセスの実践的検証Ⅱ—「個別教育計画」の運用と合理的配慮の実際— . 2017
- 7) 埼玉大学教育学部附属特別支援学校. 研究集録 32 授業づくり実践力を高めるために. 2003
- 8) 埼玉大学教育学部附属特別支援学校. 研究集録 38 知的障害のある生徒へのキャリア教育の在り方を探る—児童生徒の「自己実現」をめざす取り組み—(1年次). 2010
- 9) 埼玉大学教育学部附属特別支援学校. 研究集録 39 知的障害のある生徒へのキャリア教育の在り方を探る—児童生徒の「自己実現」をめざす取り組み—(2年次). 2011
- 10) 埼玉大学教育学部附属特別支援学校. 研究集録 40 知的障害のある生徒へのキャリア教育の在り方を探る—児童生徒の「自己実現」をめざす取り組み—(3年次). 2012
- 11) 先崎正次郎. 斎藤一雄. 総合学習のすすめ 知的障害教育課程論. 共同出版. 2013
- 12) 独立行政法人国立特殊教育総合研究所. 「育成を目指す資質・能力」をはぐくむための知的障害教育における学習評価の実践ガイド. ジアース教育新社. 2016

高等部

- 1) 文部科学省. 特別支援学校学習指導要領解説. 自立活動編(幼稚部・小学部・中学部・高等部). 海文堂出版. 2009

- 2) 埼玉大学教育学部附属特別支援学校. 研究集録 知的障害のある児童生徒へのキャリア教育の在り方を探る—児童生徒の「自己実現」をめざす取り組み—(3年次). 2012
- 3) 埼玉県教育委員会. 埼玉県特別支援教育指導資料【自立活動の指導資料】. 2011
- 4) 坂爪一幸・湯汲英史. 知的障害 発達障害のある人への合理的配慮 自立のためのコミュニケーション支援. かもがわ出版. 2015

お わ り に

副校長 神田 佳明

平成28年度から「一人一人が力を発揮し、活躍する授業づくり～実態把握からの目標設定と、評価のフィードバックを通して～」を学校研究テーマとして掲げ、新たな教育実践研究のスタートを切りました。今年度はその2年目の研究となります。

「子供たちが活躍する授業」を、教員が「子供たち一人一人が目標達成に向けて力を発揮する姿を引き出すための授業」と押さえた上で、目標をどのように設定することがよいのか？ 目標を達成する効果的な手立ては？ そもそも子供達一人一人の実力やこれまで培ってきた力をどのようにとらえればよいのか？ そしてどう評価し、次の目標設定につなげていくか？ …という問いかけの連鎖の中で、それぞれの教員の努力や工夫を引き出し、それが良い授業となっていく…。そういった意味で、この学校研究テーマそのものが私たち教員をよりよい授業づくりを引き出す効果的な仕組みであるといえます。

この研究集録を手に取り、小学部・中学部・高等部とページをめくっていくと、すぐにそれぞれのアプローチ方法が異なっていることに気づかれると思います。これは学部の段階性や各学部の「子供たちにどのような力をつけてもらいたいのか」という考え方の違いに基づくものであります。小学部では誕生からこれまでの一人一人の成育状況や学習状況を踏まえつつ、次にどのように伸ばしていくかという観点から、中学部では小学部段階を踏まえつつ、集団参加や自己有用感の一層の育成など、中学部段階に求められるものをどのように伸ばしていくかという観点から、高等部では卒業後の社会参加のみならず社会人として安定期に入る23～25歳時の姿を見すえ、一人一人をどのように伸ばしていくか、となります。ただし学校教育目標の理念のもとに人との関わりの中で社会をたくましく生きる子どもたちの育成という一つのテーマが各学部を貫いています。

改めて述べるまでもなく、本校の授業づくりにおいても個別の指導計画がベースになっていますが、本研究は個別の指導計画そのものを研究することではなく、適切な実態把握や目標・手だてを適切に設定することや、授業をどう評価し、フィードバックするか、など個別の指導計画を効果的に活用することを追求する研究です。そのため、個別の指導計画を前面に出さず、ワークシートという一つの仕掛けを通して、この集録を読まれた方がそれぞれの学校で作成している個別の指導計画の作成に寄与できることと思います。経験豊かな先生方の退職に伴い、若手の先生方が多い学校現場においても、比較的容易に、妥当な個別の指導計画が作製できるよう、必要な視点や考え方を提供していくことで、特別なニーズのある子供たちが現在および将来の活躍につながっていくことを願っています。

末筆ではありますが、本年度の研究を進めるにあたっては県教育局県立学校部特別支援教育課 島宗徹先生をはじめ、本学教育学部 葉石光一先生、中下富子先生、准教授 名越斉子先生、山中冴子先生、文教大学准教授 森正樹先生、小野里美帆先生、埼玉県立特別支援学校羽生ふじ高等学園校長小池浩次先生、同埼玉保己一学園校長佐野貴仁先生、同杉戸高等学校 山田直子先生、などたくさんの先生方にご多用の中、懇切丁寧にご指導賜りました。ここで改めてお礼申し上げますとともに、その御指導の成果を子供たち及び本校教職員の更なる成長の姿をもってお示ししたいと思います。

研究同人

【 校 長 】 戸部 秀之
【 副校長 】 神田 佳明

【 養護教諭 】 大山 洋子

【 教 諭 】

〈小学部〉
磯川あけみ
大崎由香里◎
遠山 秀雄○
仙石 大吾
茂木 絢美
永倉 充
飯田 貴子
丸山 碧
神保まなみ
鈴木 健太
小野 綾子

〈中学部〉
村瀬太一郎
三浦 駿介○
谷内田 怜○
春日 知花
加藤 智子
若林 大輔
関口 義己
加藤 和子
大迫 利衣
金子 栄生
門脇 里帆
荒井ひとみ
鈴木 隆生

〈高等部〉
田上 智明☆
佐藤 容亮○
綿谷 衛○
関根 貴博
石松 紫織
永山 宏平
栗原 悦子
安藤 剛史
今井あゆり
戸張 真衣
森 智彩登

○：研究推進係
☆：アドバイザー